虹の原特別支援学校壱岐分校　地域支援通信　第５号

（令和７年度　Ｎｏ．２）

びびっと！✨

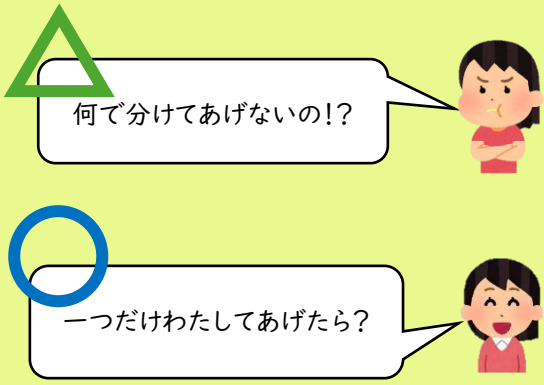
2学期が早くも終わりを迎えました。長い2学期を終えて、指導の手応えを感じた方もおられれば、「このままの指導でよいのだろうか」と悩んでおられる方もいるのではないでしょうか。

そこで今号では、「発達の道すじ」について取り上げたいと思います。前号では「認知機能」という視点で支援方法を取り上げていきましたが、今一度「定型発達児がどのような発達の道すじをたどるのか」について押さえることで、「発達のどの段階でつまずいているのか」「そのつまずきにはどのような支援が必要なのか」が明らかになっていくと思います。ぜひ、普段、指導に当たられている子供たちのことを思い浮かべながら、読んでいただけたらと思います。今号は、2～3歳の子供の発達を見ていきたいと思います。

２～３歳の子供たち

①　比べる力

2歳になる少し前、1歳半くらいになると。心の中に「対」の概念が育ち始めます。その段階の対ではまだ、自分（のもの）と相手（のもの）と分けるに過ぎません。そのため、例えば自分の粘土板の上の小麦粉粘土を隣の子から「ちょうだい」と言われても、「自分の物」「相手の物」の間には分厚い対の壁がありますから、「いや！」「あげない！」といった反応がよく見られます。しかし、2歳になると気前よく少し分け与える場面が見られるようになります。ここには、「全体と要素」「全体と部分」「たくさんと少し」という関係で捉える認識の力が芽生え始めているため、「ちょっとなら」「少しなら」と相手に分けてあげることができるようになるのです。このような認識を対比的認識と言います。そういった場面が見られるようになったとはいえ、まだ“芽生え”の段階のため、自分の世界を守ろうとする心が強く出てしまいますから、「何で分けてあげられないの？」と言いたくなる場面が多くみられます。そこをぐっとこらえて「これをどうぞしてあげたら、〇〇さんありがとうって言ってもらえるよ」などと対比的意識に立ち戻られるようにするといいです。



② 比べる言葉

先ほどの対比的意識が、2歳後半になると言葉と結びついてきます。「大きい−小さい」「多い−少ない」「高い−低い」などを言葉によって弁別できるようになります。その弁別の土台となるのは1歳半ごろから育ち始める「欲張りな心」です。自分が一度手に入れたものに対して「もっとおっきいの」「もっともっと」「いっぱいいっぱい」と求めることで、初めの量と求めたことで増えたものの量とを対比し、物理的な増加を体感し「大きい」「たくさん」「いっぱい」などの言葉がより実体のあるものになっていきます。捉え方や場面によっては“わがまま”に見えてしまうかもしれませんが、その求める心が、今後の発達のエンジンのような働きになっていきます。

「欲張り」を「意欲」と捉えてみる

学校生活の様々な場面で、「もっとしたいのに」「もっとほしい」と言ってしまうことで、学習全体の流れを止めてしまう子を、“困った子だなあ”と悩んでいることはありませんか？また、授業での発問をどこか上の空で、理解していない様子の子はいませんか？そんな子たちは、もしかしたら今号で紹介した対比的意識でつまずいているかもしれません。こちらから見ると授業の流れを止める“困った子”と思ってしまいますが、その子が本当は対比的意識が未発達かもしれない“困っている子”なのかもしれません。

小学校3年生からは、対比的意識を具体から抽象に、手元の操作から脳内での操作に変えていかなければならない活動（抽象的思考）が格段に増えていきます。そんな中で、「もっともっと」という経験を十分に積むことができておらず、対比的意識を十分に身に付けることができていないと、そのような抽象的思考が難しくなってしまいます。

子供の「もっともっと」を全て受け入れることは、一斉指導の中では難しいかもしれません。ですが、先ほどの例に挙げたように、一部を受け入れて次に進ませる経験を積ませることで、子供は部分的

にでも満足感を得られるだけでなく、受け入れてもらいつつ、自分を少し抑えることができた経験を積むことができ、これはレジリエンス（心の弾力）を育てることにもつながります。

「もっともっと」は“欲張り”ではなく、“意欲の表れ”と捉えていくとよいですね。

≪引用・参考文献≫

〇『発達の扉 上 子どもの発達の道すじ』 白石正久 かもがわ出版 (1994/8/10)